

平和主義者のジレンマー

ヒサエ・ヤマモトの “The High-Heeled Shoes” と
その背景にみる性/人種差別と暴力

村 山 瑞 穂

序

1948年10月号の *Partisan Review* に掲載された “The High-Heeled Shoes” は、Hisaye Yamamoto (1921-) の全米デビューを飾る重要な短篇である。それまで全米レベルで名の通った日系アメリカ人作家はほとんどなく、しかもまだ反日の気分が強く残る大戦直後、ヤマモトの投稿作品が当時のアメリカで最も影響力があったといわれる雑誌に掲載されたことは注目に値する⁽¹⁾。しかし、この短篇については、ヤマモトの再評価が始まった1980年代の論文でいくつかの指摘がなれているものの、これまでとくに取り上げられることがなかったのも事実である。それら初期の批評では、ヤマモトの短篇の基本的な特徴を備えた原型的作品として「ハイヒール」を位置づけている⁽²⁾。こうした分析は短篇を内在的に論じるものであるが、作品を取り巻く外の世界、物語の背景を重ねてもう一度本篇を読み直してみると、そのギャップから思わぬ論点が浮き上がってきた。

「ハイヒール」が実際の出来事に基づいた作品であることに疑いはない。その証拠に、ヤマモトの短篇集 *Seventeen Syllables and Other Stories* では『パーティザン・レビュー』掲載時のタイトルに “A Memoir” という副題が付け加えられ、本篇がヤマモト自身の記憶に負うものであることを改めて強調するものになっている⁽³⁾。もちろん、作品はあくまでフィクションであり、ヤマモトの体験や記憶はそのまま再現されているわけではない。それらが再構築され、変形されて、物語は完成しているのである。ヤマモトは戦後、アリゾナ州ポストンの強制収容所からロサンゼルスに帰還し、1945年から1948年までアフリカ系アメリカ週刊新聞 *Los Angeles Tribune* に職を得て、記事の書き直しや校正などの仕事のほかに、コラムニストとして同誌にエッセイを連載していた。「ハイヒール」はヤマモトが『ロサンゼルス・トリビューン』(以下『トリビューン』と略記) を辞する数ヶ月前に発表されており、彼女が新聞社に勤務していた時代が背景になってい

ると推測できる。

拙論「ある異人種間文化統合の試み—ヒサエ・ヤマモトと『ロサンゼルス・トリビューン』」では、これまでの研究では抜け落ちていたヒサエ・ヤマモトと『トリビューン』との関係を、主にヤマモトの担当コラム“Small talk...”の分析によって明らかにした。コラムのエッセイは、身近な日常の出来事から政治問題、映画評、書評まで実に広い話題を扱っているが、とくに『トリビューン』の人種問題への先鋭な政治意識を反映した部分からは、ヤマモトが人種差別への抵抗と共闘において『トリビューン』と基本的な姿勢を共有しながら両者の間には葛藤もあり、その溝は最終的に埋まることがなかったことがわかる。その原因としては、日系アメリカ人とアフリカ系アメリカ人それぞれのグループの人種差別問題に対する温度差、日系アメリカ人のアフリカ系アメリカ人に対する根強い偏見と白人社会への同化志向、他の人種的マイノリティ以上にアフリカ系に対する差別を強化する主流社会の動きが考えられる。さらに、ヤマモト自身にかかわる問題として、彼女の本質主義的な人種観への懷疑と平和主義者としての姿勢が、『トリビューン』の政治性との摩擦を生んでいったようだ。これらの考察をもとに「ハイヒール」を読み直してみると、これをただ単に“vignettes of sexual harassment” (Cheung: 1988, xi) として受け流してしまえない複雑な問題が透けて見えるのである。ヤマモトのコラムが、当時の彼女を取り巻く状況をより事実に近い形で伝えていることを前提にしたとき、「ハイヒール」に描かれている物語とそれらとの齟齬は、いったい何を示唆するのだろうか。

I

まず「ハイヒール」のテーマとして、チャンも指摘する女性の視点から描く性暴力の問題を挙げることができる。アメリカ社会において“sexual harassment”⁽⁴⁾ が「女性によって定義された唯一の法律用語」(Kramarae & Treichler, 413) として確立し、性暴力、性的嫌がらせに関する社会認識が喚起されるようになった1970年代を遡ること約30年、そこに時代を先取りするヤマモトのジェンダー意識の反映を見ることは難しいことではない。ただし、Elaine H. Kimらが評価してきたヤマモトのフェミニスト的視点は、日系二世としての彼女のアイデンティティと切り離しては考え

られないものであり、これまでの議論はヤマモトのテキストが内包するジェンダーとエスニシティの交差路に集中してきた。しかしこの短篇については、彼女のテキストでは自明と考えられているジェンダーとエスニシティの連結に微妙なずれが見られるのである。

物語はある朝の出来事から始まる。電話のベルが鳴り、受話器を取ると Tony と名乗る男からである。その名前に心当たりのない「私」は電話を切ろうとするが、男は執拗に食下がる。相手はセールスマンかとも考え、用件を尋ねると、いきなり性的欲求を突きつけられる。驚愕し、とっさに電話を切った後も動搖は収まらない。近所に住む少女のために花を摘んでも、またそのお返しに届けられた花を生けてみても気分は晴れない。美しい花を目にしていても、意識が向かうのはかつて経験した同様の忌まわしい出来事である。一つは同居人で職場の同僚でもある Mary が、まだ薄暗い早朝に出勤途中、男に襲われ、キスかレイプかの選択を迫られた事件である。当然、彼女はキスを選ぶほかはなかった。しかも、事件を警察に通報したものの、その対応は非常におざなりなものであった。もう一つは「私」自身の経験である。同じく通勤途中、駐車しているセダンの開いたドアから組んだ両足が外に伸びている光景が目に入った。ハイヒールを履いた足を女性のものだと思い込み、通り過ぎようすると、何と座席に横たわっていたのは女性ではなく男性、しかも黒のハイヒール以外は何も身につけていない裸の男性であった。その時の衝撃は職場の忙しさに紛れさせ、意識の奥に仕舞い込んでしまっていたが、この手の事件が起きるたびに鮮やかに甦ってくる。

こうした男たちの行為をどう理解し、どう対処すべきなのか。これまで性科学者たちの著作をかなり読んではいたが、何の備えにもならなかった。そこで「私」は、今読んでいる Gandhi こそがこの問題にふさわしい解決法を与えてくれるのではないかと思い当たる。しかし、女性が痴漢に襲われた時の対処法を尋ねられたとき、ガンジーは暴力には非暴力で対処するのが本当の勇気であるとし、自己防衛や逃走さえも否定し、その論理で核武装に走る世界の臆病さを批判したのだった。ガンジーの言葉は、それを読んだときはなるほどと思ったものの、いざ実際の体験を前にすると何の役にも立たないことに気づかされる。それではトニーのような相手に対して、具体的にどう対応したらよかっただろう。「私」は効果的な言葉を模索し、様々な場面をシミュレーションしてみるのだが答は出ない。すると再び電

話のベルが鳴る。トニーからでは、とこわごわ受話器を取ると、今度は聞き慣れたおばさんの声で、料理を持参するから夕食の準備は必要ないという親切な申し出だった。

このように、物語では性暴力に遭遇した女性の心理が率直に語られ、その恐怖、怒り、苦しみに無理解な男性権威と、それを前にしてなすすべのない女性の孤独や無力感が描き出されている。性暴力の被害経験を共有するメアリーと「私」、まだそうした経験に晒されていない無垢な象徴としての花をめぐる少女、そして最後にこうした事件がもたらす “a great, dark sickness on earth” (6) から一時的にせよ救い出してくれたおばさん、と女性たちを結ぶ輪が強調される一方で、警察、フロイトやクラフト-エビングをはじめとする性科学者、ガンジーなどが、性暴力に苦しむ女性たちに對して真の理解、共感を示すことのない男性権威の壁としてジェンダー対比的に配置されている。上述の粗筋は、実際はより豊かな肉付けがなされており、例えば警察の対応をめぐる皮肉な顛末も、以下のように詳細に書き込まれている。

相手の顔を確認できたわけではないと弱気なメアリーが、とにかく再発を防ぐためにもと職場の女性たちに説き伏せられて警察に足を運ぶ。すると、警官たちは事務的に遺憾の素振りは見せても、彼女の話を興味本位で受け流し、にやにや笑いを浮かべてまともに取り合わなかった。それを聞いた職場の男性上司が電話をかけると、彼らは態度を一変させ、わざわざ出向いてメアリーを事情聴取し直し、その夜は付近をパトロールする姿も目撃された。しかし、約束された早朝のパトロールは行われず、「私」たちは早朝出勤の際にはなげなしのお金をはたいてタクシーに乗合わせることにし、夜の一人歩きも著しく制限されることになった。

語り手の報告は事件の経緯を淡々と、しかし皮肉を込めて語り、性暴力の背後にはジェンダーによって分断された男女の不均衡な力関係が深く関わっていることを示している。性暴力の裏にある構造化された性差別を見抜くヤマモトの観察眼が感じ取れるところである。ではこの性暴力とジェンダーの問題に、エスニシティはどう関わるのだろうか。粗筋では、あえてエスニシティへの言及を省いて説明したが、庭に咲き誇るパンジーを植えてくれた若夫婦の名前が “Wakako and Chester” (2) であり、おばさんの名前が “Miné” (6) であること、また、彼女が用意している「御萩や寿司」“ricecakes with Indian bean frosting, as well as pickled fish on

vinegared rice” (6-7)、「刺身」“yellow-tail, to slice and eat raw” (7)といった日本食の描写が、語り手が日系アメリカ人であること詳らかにしている。エスニシティが明らかにされているのは、語り手だけではない。花をやり取りする隣の少女についても、以下のように説明されている。

Margarita is the seven-year-old girl next door. She has never known any mother or father, only *tias* and *tios* who share none of her blood. She has a face that looks as if it had been chiseled with utter care out of cream and pale pink marble. Her soft brown hair hangs in plaits as low as her waist. And these days, because the Catholic school is full and cannot take her, she wanders lonesomely about, with plenty of time for such amenities as dropping in to admire a neighbor’s flowers. (2)

「マルガリータ」という名前や、斜体で強調された「おじ」と「おば」に当たるスペイン語、カトリック学校の問題に触れていることから、少女はメキシコ系アメリカ人であると考えられる。

実を言えば、短篇中のワカコもマルガリータも、『トリビューン』のヤマモトのコラム「スマール・トーク」ではお馴染みの人物である。コラムのエッセイの多くはヤマモトの身の回りの出来事を扱っており、実名で様々な人物を登場させている。ワカコとは、ポストン収容所時代からのヤマモトの親友 Wakako Yamauchi⁽⁵⁾だと考えられる。彼女は住宅難の終戦直後、ヤマモトが借りていた家に他の多くの同居人とともに寄留していたのである。1945年7月16日のヤマモトのコラムは、それまで住んでいたエヴァグリーン・ホステルから一戸建の家に移り住めるようになった喜びを綴っている。それによれば、当時長老派教会所有のそのホステルは、時代によって異なった目的で使われてきたが、大戦後は収容所から戻った日系人の短期逗留所として提供され、60人から80人の収容定員のところ、ピーク時には115人の帰還者が滞在していたという。過密状態のホステルから「三つのベッドルームと大きな居間、居心地のいい台所」の付いた家に移ったヤマモトは、家族（父と二人の弟）のほかにも多くの知り合いを同居させていたのである。ヤマウチは “It was like a hostel at her house” (Cheung : 2000, 361)と回想している。短篇中のメアリーも同居人の日系二世 Mary Kitano がモデルであろう。彼女もまた「スマール・トーク」に頻繁に登場している。短篇では、メアリーは「同居人で職場の同僚である」

という記述以外に、彼女個人や当時の日系人の置かれていた状況についての説明があるわけではない。内陸部の強制収容所からロサンゼルスに帰還した日系アメリカ人が直面していた戦後の住宅難や、日系二世には英語名を持つ者が少なくないことを知らない読者には、短篇中のメアリーのエスニシティを特定することは難しいだろう。ちなみに、ワカコの夫チャーリーも実名でコラムに登場する日系二世である。ミネという名のおばさんは、少なくとも「スマート・トーク」には登場しない。

少女マルガリータについてもコラムで幾度か言及されている。ヤマモトの家の近隣に住んでいたメキシコ系アメリカ人家族との交流がコラムの話題になっているのである。例えば 1947 年 11 月 29 日のコラムでは、マルガリータとカトリック学校の問題が取り上げられている。そこでは “Margarita at six is a lovely child, as dark-eye, dark-haired Alberto is at 7, her face seeming to be chiseled with utter care out of white and pale pink marble, her brown hair hanging in plaits as low as her waist.” と、年齢にずれがあり、顔の色を描写する “white” が “cream” に変えられているなど多少の違いがあるが、先ほどの短篇の引用とほぼ重なる表現でマルガリータの愛らしい容姿が描写されている。しかし、このコラムでは、カトリック学校に通うことになったマルガリータと公立学校に通う幼馴染のアルベルトとの間に生じた距離が話題になっている。別々の小学校に上がったとたん、仲良しのマルガリータに相手にされなくなったアルベルトの孤独に焦点が当てられているのである。また 1948 年 7 月 10 日のコラムでは、マルガリータが弟のアルマンドとともにヤマモトに花を届けてくれたエピソードも紹介されている。しかし、彼女には父母が無く、血縁関係のない人々によって育てられているという短篇での説明は、コラムではとくに見当たらない。このように、短篇のマルガリータはコラムのマルガリータをモデルにしながらも、より孤独な境遇にあるように描かれており、あたかも性暴力に苦しむ大人の女性たちの孤独や疎外感と共振するように造詣されている点に注意する必要がある。

語り手とマルガリータの交流に、日系アメリカ人とメキシコ系アメリカ人が隣り合って生きる第二次大戦直後のロサンゼルスの断片を垣間見ることができる。マルガリータの描写でもわかるように、短篇の細部は様々な色にあふれており、庭のパンジーを例にとっても “lemon yellow, deep purple, clear violet, mottled brown” (2) と色彩豊かに表現されている。

物語全体に氾濫する色の描写は、多人種、多民族から成るロサンゼルスという都市の提喻(synecdoche)と解釈できるかもしれない。しかしながら、ここに明らかに抜け落ちている色があるのだ。

物語中の性暴力の加害者については、まずは電話を通じての言葉による暴力、そして薄暗闇にまぎれての背後からの物理的暴力と、どちらも視覚的には明確なイメージを描くことはできない。しかし、タイトルにも関係するハイヒールを履いた裸の男の足というショッキングなイメージは、それ自体が視覚的な暴力である。この場面の描写では、駐車していたセダンは“blue”、そしてハイヒールは“black”と色が明示されている。にもかかわらず、ここで語り手の視覚に入ったに違いない男の肌の色についての言及はない。加害者の肌の色、すなわち男のエスニシティは不間に伏されているのである。確かに、この色が明らかにされれば、物語は抜き差しならない複雑な問題を抱え込むであろうことは容易に想像できる。どの色であっても、セクシュアリティとエスニシティを結び付けた差別的ステレオ・タイプを誘発しかねない。「黒いハイヒール」というイメージに男の倒錯的な性のまがまがしさを象徴させるのが描写の限界といえるだろう。

セクシュアリティの介入によってある部分のエスニシティが無化されているという指摘は、メアリーの事件についても当てはまる。先に説明したように、物語の中では彼女についての詳しい記述がないため、メアリーのエスニシティについて特定することは難しい。しかし、もし彼女が日系アメリカ人であるとはっきり示されていたら、問題はやはり複雑になる。ロサンゼルス市警のエスニック・マイノリティへの悪名高い差別的態度を考える時、メアリーに向けられた警察官たちの嘲笑的な態度は女性差別によるものだけではなかったのではないか、という疑問が生じるのである。

このように、短篇では、性暴力というテーマがジェンダーとセクシュアリティに絡む問題であることを示唆しつつ、そこにエスニシティを連結させないように巧妙な操作が働いているといえるかもしれない。まだセクシュアリティ、ジェンダー、エスニシティの関係性を語る言葉そのものが存在しない戦後間もないこの時期、セクシュアリティとエスニシティを連結させることはタブーであり、それを語ることじたいが困難であったともいえる。しかし、その結果、ジェンダーとエスニシティの連結にいくらかの曖昧さが生じているように見える。少なくとも性暴力というテーマのもとで、エスニシティや人種の差異よりジェンダーの差異に問題の比重が置

かれているのである。

II

エスニシティと色の比喩でいうなら、本篇にはもう一つ抜け落ちている重要な色がある。語り手とメアリーの職場が新聞社であることは、語り手が印刷室で校正の仕事をする場面の描写からも明らかであり、これが『トリビューン』をモデルにしていることも容易に察しがつく。しかし、物語からはアフリカ系アメリカ人に関する言及がものの見事に抜け落ちているのである。その理由の一つとしては、これまで議論してきたように、エスニシティとセクシュアリティの問題を結びつけて語ることの困難があると考えられる。多民族都市ロサンゼルスが、エスニシティによって住み分けられ、エスニシティごとに隔離された都市でもあることを思い出さなくてはならない。出勤途中に起こる二つの事件は、その界隈の治安の悪さをほのめかすことにもなる。そして、それが『トリビューン』のオフィスが置かれていたダンバーホテルの建つセントラル・アベニューを中心とするアフリカ系アメリカ人地区であるなら、性暴力とアフリカ系アメリカ人が結びつけられる可能性も高い。ヤマモトにとって、それは絶対に避けたいことであったに違いない。

さらに、ここでもう一つ別の角度から、ヤマモトが物語からアフリカ系アメリカ人に関する部分を消し去ってしまった理由を考えてみたい。それは、拙論のヤマモトのコラム分析から明らかになった当時の『トリビューン』とヤマモトの間に生じていた人種差別と暴力の問題をめぐる激しい対立である。両者の対立は1948年6月26日の『トリビューン』紙上において、ヤマモトのコラム「スマール・トーク」と、それに対して編集者 Almena Davis が彼女自身のコラム “How ‘bout this...?” で展開した反論に示されている。

ヤマモトとデイヴィスの対立は、ビミニ浴場からの「黒人と東洋人」の締め出しに抗議するために数回にわたって組織された CORE (the Congress of Racial Equality 人種平等会議) の抗議行動の一つを報告する『トリビューン』の記事に関するものである。平和主義者への道を摸索していたヤマモトは当時、非暴力の直接行動によって人種差別に立ち向かう人種混合組織 CORE の活動に参加していた。ヤマモトのコラムは、ビミニ浴場

の抗議集会についての彼女の報告文を「編集者が『さえない』(“colorless”)『できそない』(“lousy”)と断罪し、よりセンセーショナルな内容に書き換えたことに対し、いつにない調子で怒りを爆発させている。」(村山、139)確かに、その一週間前の『トリビューン』は、“Fear police may fire on peaceful pickets” の見出しで、もし自分がビミニの警護に当たっていたら CORE のメンバーを押し倒したぐらいでは済まず、“it was not impossible for ‘someone’ to get shot” と述べたとする警察官の記事を掲載している。ヤマモトは、実際には起こってもいない警察官の銃による暴力を、あたかも必ず起こることのように先取りしてセンセーショナルに書きたてたことが、“The best protection newspapers can offer against distortion, exaggeration, and gossip is frank, uncolored publication of the facts” とする『トリビューン』の方針に反する重大な問題だと批判している。

これに先立つ二週間前の 6 月 12 日付けの『トリビューン』では、“Youth cut as minorities ask swim rights” の見出しのもと “Some blood and splintered glass got mixed up in the local Committee of Racial Equality’s “non-violent” picketing of Bimini Hot Spring last Friday night when one CORE member, Kemper Nomland, Jr., white, was pushed through a glass door by a Bimini lifeguard” とビミニの警護官が CORE の白人メンバーをガラスのドア越しに押し出して傷を負わせた（病院に行くほどの重傷ではなかったが）事件が報道されている。しかし、ヤマモトはこれについても、“a through cad and bounder” のように書かれている警護官が CORE のメンバーにポップコーンを勧めるような友好的な面も見せていたことや、傷ついた若者の傷の手当てをしたのはビミニ浴場の管理人だったことなどが記事からは削られ、ビミニ側の CORE への暴力をことさらに誇張するように書き変えられたと主張している。

ヤマモトはまた、報告文の書き直しをめぐる議論の中で、編集者が CORE について “its idea of ‘non-violent direct action’ is peculiarly spineless and ‘nice-nasty’ guaranteed to get no results” と厳しく批判したこと暴露している。そして彼女自身は、“I am convinced that ‘non-violence direct action’ is the most beautiful and practical way now available to oppose wrongs” と CORE の活動を強く擁護し、最後には丁寧にもその綱領を一つ一つ箇条書きで紹介している。ヤマモトのコラム・エッセイが、多くの場合、怒りをユーモアと皮肉に包み、直接的に表現し

ていないことを考えても、ここでの彼女のあからさまな怒りの表出に驚かされる。

これらヤマモトの主張に対し、編集者デイヴィスはまず、編集の際に述べた CORE についてのいわば私的な彼女の発言を、ヤマモトが断りなしに紙面で公表して辛らつに敲いたことを二人の友情を損ねるものとして批判している。そして暴力の可能性を誇張して伝えたという批判に対しては、“I should have written it the way I did had I had a quadruple murder with overtones of incest, miscegenation and bank robbery to headline”と皮肉を込めて反発している。そして、黒人新聞の編集者として矢面に立つ若い黒人女性である自分が日ごろ感じている脅威が過度に反映されているかもしれないが、ビミニ寄りの警官が発砲するかもしれないと感じた恐怖そのものは偽りのない真正なものだ、と次のように主張している。

As for the headline, it may have been giving undue prominence to the fears of one black girl with the temerity to force herself off on the populace as an editor, but I did fear, and still do fear, that some over-zealous cop may let his sympathy for the Bimini management carry him too far one of these Friday or Saturday nights.

彼女は CORE の活動そのものについて憤慨している訳ではないし、『トレビューン』はこれまでその活動を支援し、報道してきた数少ない新聞の一つであるとも反論している。ただ CORE の活動の有効性については疑問があり、とくに運動が公に取り上げられることが少なく沈黙に置かれているのは致命的であり、CORE は軽んじているようだが、自分は人種差別の問題を法に訴えて裁判で解決する方をよしとすると述べている。

このように二人の対立は、人種差別による暴力を言葉によってどう伝えるか、という報道のあり方についての考え方の違いとともに、CORE の活動に関する意見の相違を際立たせている。CORE は FOR (the Fellowship of Reconciliation) から分派し、Mohandas Gandhi がインド独立で使った非暴力の手法を人種差別の戦いに応用すべく、1942 年にシカゴ大学の黒人学生 Haward Farmer と白人学生 George Housen によってシカゴに設立された団体である (Williams, 144-45)。CORE が 60 年代の深南部において Martin Luther King Jr. を中心に展開された公民権運動に大きく貢献したことは知られている⁽⁶⁾。しかし、次に Dennis Chong が指摘するよう

に、設立当初の CORE の影響力はかなり限定されたものだったようだ。

CORE had difficulty attracting followers because of its incipient status as a new, generally unknown and untested organization. People were especially reluctant to subject themselves to the considerable risks required of CORE members because CORE's techniques were unproven. Although CORE initiated local projects in cities around the country aimed at ending discriminatory practices in housing, accommodations, employment, and schools, it counted only a limited number of victories, and almost all of them involved the integration of public facilities such as restaurants. Therefore not only was white opinion aligned against more substantial changes in race relations but the black population in the 1940s was unprepared to rally behind the new tactics of the relatively unknown CORE organization. (99)

ヤマモトがコラムで CORE について触れているのは、1947年7月5日、黒人へのサービスを拒むダウンタウンの Bullock's Tearoom での抗議の座り込みに参加したことを報告したのが最初である。それについては7月26日、8月16日のコラムでも経過が報じられている。この座り込みは成功し (CORE の直接行動が効を奏したというより、ある有力者の圧力によるものだったとデイヴィスは述べている)、ビミニの件も結果的に成功し、1948年7月17日の『トリビューン』では “You can swim at Bimini now, whatever your color” と報じられている。しかし、チョンがまとめているように、当時の過酷な人種差別の現実から見れば、これらの成功は焼け石に水の感を免れなかったのも事実だろう。だが一方、デイヴィスが主張する裁判に訴える方法が有効かという点に関しては、ヤマモトが “The only way to break down the discrimination, you say, is to sue and sue again, until there are a couple of hundred civil rights suits, each worth at least \$200, pending against Bimini” と問題のコラムの中で批判しているように、金のかかる係争中の訴訟ばかりが増えて、実質的な改善が望めなかつたのも現実ではなかっただろうか。

公民権運動の戦略について、二人のどちらの主張が正しかったかを判断することは本論の範囲を超えてるのでひとまず置くとして、ここで確認しておきたいことは “a genuine pacifist ('Small talk...', Sep. 14, 1946)” になるべく努力していた当時のヤマモトが CORE の活動に強く惹きつけられていたことである。報道をめぐる対立も、つまるところヤマモトの平

和主義者としてのスタンスが、デイヴィスとの意見の違いを生んでいるように思える。すなわち、人種差別の暴力に対してことさら暴力的側面を強調して差別側と被差別側の対立をあおるやり方が、ヤマモトには受け入れられなかつたのではないだろうか。現実の暴力に対して感じる恐怖を伝えるためにはどれだけ誇張しても誇張しすぎることはない、とするデイヴィスの意見は、その恐怖を乗り越えることこそを訴えるヤマモトの平和主義とは相容れないものである⁽⁷⁾。

ヤマモトの平和主義者としての模索は、『トリビューン』に職を得た頃からすでに始まっていたようだ。彼女は連載コラム “Reflections in a Cracked Mirror” を担当していたアフリカ系アメリカ人コラムニスト Erna P. Harris の後を継ぐ形でコラムを書き始めている。ヤマモトは、ハリスのように人種差別問題 (“black-and-white”) に敏感に反応する有能な政治コラムニストを目指してはいるが、自分は何よりも平和主義者としての道を追及しており、しかもその道のりは遠いと初期のコラム（1945 年 8 月 13 日）で告白している。

My particular trouble is that I am hoping to follow a road that Erna P. Harris knows well, and that I am not ready to put down my embryo findings in black-and-white. Absorbed in becoming grounded in the fundamentals of active pacifism, I am daily dismayed at how little I have been qualified to call myself a pacifist.

そんな彼女が 1947 年の夏頃までに辿り着いたのが CORE の活動だったのである。

III

短篇「ハイヒール」が『パーティザン・レビュー』に掲載されたのは、上で述べたヤマモトとデイヴィスの対立から約四ヶ月後のことである。短篇の後半は、性暴力、とくに言葉による暴力にいかに対処すべきだったどうか、と語り手が具体的な答えを模索する議論に費やされている。嫌がらせの言葉を聞いたとき、語り手はとっさに受話器を置くことしかできなかつたのだが、果たしてその場で有効な受け答えが可能だつたどうか、言葉の暴力に対していかに対抗できただろうか、と煩悶を続けるのである。

これまでの本論の考察を踏まえて考えれば、短篇のこの部分は、まさに『トリビューン』紙上での人種差別と暴力をめぐるヤマモトと編集者デイヴィスの論争を、性暴力、すなわち性差別と暴力の問題に移し替えて語っているとは考えられないだろうか。

ただし短篇では、『トリビューン』紙上の論争時とは明らかに異なる点もみられる。CORE の基本方針としてヤマモトが信奉していたガンジーの非暴力主義が批判され、人種差別の暴力的現実を前に非暴力主義の有効性を疑うデイヴィスの意見に傾いているようにみえるのである。短篇におけるガンジーは高邁な理論に逃避する人物として次のように風刺されている。

Of all the men suspected of sainthood, Gandhi, measured by his own testimony, should have been able to offer the most comfort here. But he evaded the issue. In place of the tangible example, vague words. Gandhi, in face of the ubiquitous womanly fear, was a failure. All he had really said was: don't even think about it. Then (I guessed), holding up his strong, bony brown hand, he had shaken his white-fuzzed, compactly-shaped head slowly back and forth and declined to hear the ifs and buts. The rest, as they say, was silence. (5)

ここでは、ガンジーの非暴力主義は、女性が現実に直面している恐怖を和らげるための有効な手段を示すことができない机上の空論として却下されている。ガンジーの聖性がはぎ落とされ、コミカルな漫画的な人物へと矮小化されているのである。

この描写は、デイヴィスとの対立以前、1948年4月24日、ガンジーの死に寄せたヤマモトのコラムの内容とは対照的である。コラムでは、ガンジーを愚者と論じていた Hearst 系の新聞が彼の追悼文を掲載したことを偽善であると告発する意見を紹介している。ヤマモトはそれに賛同を示しながらも、ガンジーの死によって失われたものを少しでも多くの人々が共有できるなら希望があると述べた上で、ガンジーの訃報を知った際の自分自身の落胆と悲しみを伝えている。そのなかで、彼女はラジオで聞いたガンジーの声について次のように描写している。

The radio brought the disembodied sound, and the meaning of the sound I don't remember. I only know it contained peace, the sort of peace which accepts both life and death with love. There was also in it, and perhaps this

was part of the peace, a gentleness of the kind one expects to find, but rarely finds, in a woman speaking, which made it doubly precious in a man speaking.

ここでヤマモトは、「生と死を愛で包み受け入れる」ガンジーの声の平和の響きに、女性的な優しさを聞き取り、彼の両性具有的な側面を強調している⁽⁸⁾。これは、短篇においてガンジーが警察やフロイトらと同列に、女性の現実的恐怖に理解を示さない男性権威に連ねられているのと大きく異なる。

確かに、短篇ではガンジーの非暴力主義の有効性が問われ、否定されているように思える。語り手はガンジーの考えに幻滅を覚えた後も、もしガンジーの方法を借りて電話に対応していたらどうだっただろう、と具体的な会話をあれこれと想定してみる。しかし、満足のゆく答えは見出せず、“Anyway, it was too late. And, after all, Gandhi was Gandhi, an old man, moreover dead, and I was I, a young woman, more or less alive”

(6)と結論づけることになる。だが、その後続けて語り手は次のようにも言うのである。“Since I was unable to hit on the proper pacifist approach, in this crisis, should I, eschewing cowardice, have shouted bitter, indignant words to frighten Tony? Not that, either.” (6) 語り手は、暴力に適切に対峙する平和主義的な方策を見つけられずにはいるが、それは必ずしも平和主義を完全に放棄することを意味しているのではない。少なくとも暴力的な言葉に暴力的な言葉で対応することだけは、ここできっぱりと否定しているのである。

語り手の問い合わせはさらに続く。今度は、トニーを暖かく迎えるふりをして、警察と待ち伏せし、彼を捕らえて法によって裁くのはどうだろうと。しかし、刑務所に送ることが本当に彼を改心させ、結果的に社会から性暴力をなくすことになるだろうかと考えると、法という力による制裁にも懷疑的になる。さらには、自分が叩きつけるように切った電話をトニーはどう受け取っただろう、などとも考えてみる。この時点で、語り手はトニーを単なる加害者や敵対者としてではなく、同じ一人の人間として捉え、彼の立場に立って問い合わせを発していることに留意したい。しかし最終的に、“Whatever, whatever—I knew I had discovered yet another circle to put away with my collection of circles. I was back to what I had

started with, the helpless, absolutely useless knowledge..." (6) と、答えのない問い合わせが波紋のように広がるばかりで、語り手の問い合わせは何の進展も見出せないまま振り出しに戻ってしまうのである。絶望の底に沈む彼女を救い出してくれたのが、ミネおばさんの電話である。エンディングは始まりと同様、かかってきた電話で締めくくられ、物語は一つの円環を描くようにバランスよく構成されて終わる。

結果的に語り手の問い合わせは、何一つ満足な答えが得られないまま物語は終わっている。しかし、暴力の現実を前にしての非暴力主義、平和主義の有効性を問題にしつつ、語り手は最後まで平和主義者としてのスタンスで問い合わせをしていないだろうか。答えのない問い合わせは、自己批判する平和主義者のジレンマそのものを映し出しているのである。ヤマモトはこの短篇において、物語からアフリカ系アメリカ人に関する要素を完全に除外し、人種差別と暴力の問題を性差別と暴力の問題に置き換えて語っている。これは差別と暴力という点で、ジェンダーと人種の問題が深く結びついていることを見抜くヤマモトの洞察力を示している。と同時に、ヤマモトが直面していた人種差別と暴力とそれについての表現をめぐる『トリビューン』の編集者との抜き差しならない対立点を、本短篇では自己批判も込めつつ別の形で表現したとも受け取れる。当時、現実により深く捉えられていた人種差別問題から、まだそれほど公の議論に上ることのなかった性暴力へとテーマに移すことで、ヤマモトは両者に通底する論点をある種の距離をもって自由に扱うことができたのではないだろうか。短篇全体を支配しているのは、重苦さに塗り込められないユーモアを交えた軽さのトーンでもあることが、それを裏付けているようだ。

ここでもう一つ付加えると、この短篇は、言葉、そして語ることにこだわる若い作家の自意識あふれる作品としても読めるだろう。冒頭部でトニーと名乗る男がしつこく言葉をつなぎ、語り手の注意を引こうとするときに感じる彼女の不快感が "I am suddenly in a bad humor, suspecting a trap in which I shall be imprisoned uncomfortably by words, words, words..." (1) と表現されるのにはじまり、後半部で繰り返される言葉の模索まで、物語は言葉へのこだわりに満ちている。語り手は最後まで暴力に対抗する適切な言葉を見つけることができない。しかし、飽きることなく繰り出される問い合わせは、語り手の言葉への執着、言葉を模索する熱いエネルギーを伝えてもらっているのである。

結びにかえて

人種差別であれ、性差別であれ、暴力と差別の問題にいかに立ち向かうべきなのか、言葉のレベルから物理的なレベルまで、私たちはいまだに明確な答を得ていないのではないか。編集者ディヴィスとヤマモトの論争、そしてヤマモトの短篇が問いかけている問題は、暴力の連鎖に苦しむ世界情勢下で、今なお私たちが悩み、模索し続けている問題でもある。ヤマモトは1948年の終わり頃までに『トリビューン』を辞職している⁽⁹⁾。その後も彼女がCOREの活動を続けていた様子は、1949年11月21日付のロサンゼルスの日系新聞*Rafu Shimpo*のメアリー・キタノのコラム“SNAFU”で伝えられている。それからしばらくして、ヤマモトはCOREの活動から離れ、“its non-violence, voluntary poverty, love for the land, and attempt to put into practice the precepts of the Sermon on the Mount” (“Writing”, 67) に惹かれて1953年から1955年までニューヨークのスタッテン島にあるCatholic Workerのリハビリ農場に移り住んでいる。「真の平和主義者」を志すヤマモトの模索が、彼女の当時の人間としての生き方を支える根本にあったことを明記しておきたい。

Notes

- (1) 『パーティザン・レビュー』は、1934年マルキストの政治文芸雑誌として創刊されたが、1937年に方針変換し、アメリカ共産党とは袂を分かつラディカル雑誌として再出発した。1940年代に入るとアメリカの文化主潮を形成する文学的知的フォーラムとしての役割を果たした(秋元、14-15)。ヤマモトはこの短篇をまず『ニューヨーカー』に投稿したが、不採用になったため『パーティザン』に送ったと述べている(“Writing”, 64-65)。作品の政治性が『パーティザン』の目に留まったとも考えられる。
- (2) Robert T. Rolfは、ある特定の出来事から始め、それを哲学的考察へと展開させてゆくヤマモトの「帰納的」(inductive)な語りの基本的なスタイルを「ハイヒール」に見ている(91)。また、McDonald & Newmanは実際の出来事への言及、具体的な細部にこだわる描写、獨白や想像上の会話の挿入、オープン・エンディングなどの形式的特徴、さらに作品すべてに共通する人間愛のテーマがすでに「ハイヒール」に現れていると指摘している(24-25)。
- (3) 以下、短篇の引用はこの短編集からのものである。
- (4) 「セクシャルハラスメント」の定義として、「行為者の意図にかかわらず相手を不快にさせる性的言動をいう。性的に攻撃することで相手を支配し、相手の学習権や研究

する権利、働く権利を奪うとともに、性的自由と尊厳を侵害する。……相手が NOと言えない立場にあることを利用して行われる行為であり、相手が不快であるかどうかがポイントである。……その形態は、強姦から身体接触や言葉での嫌がらせまで多様である。被害者は圧倒的に女性が多いが、男性も被害者に、女性も加害者になる場合があるし、異性愛者間に限らない」を挙げておく。(戒能、216.)

- (5) ワカコ・ヤマウチ(1924-)はヤマモトの影響を受け、後に *And the Soul Shall Dance* (1982) をはじめとする劇作家および短篇作家として活躍していることは周知のとおりである。
- (6) ただしその後も都市部における CORE の活動は目立った成果をあげることができなかった。南部での人種隔離政策撤廃運動の成功とは裏腹に、ロサンゼルスでは 1965 年史上最悪の人種暴動といわれる Watts 暴動が起きている。その際の CORE の活動については、Horne (181-82) に詳しい。
- (7) ヤマモトの平和主義者としてスタンスは、本質主義的な人種観への彼女の懷疑とも結びついていることは明らかである。ビミニ側を CORE の敵対者として一枚岩的に捉え、両者の対立を際立たせようとする編集者への反発がそれを示している。(参照、村山、137-39.)
- (8) ここで、ヤマモトは人々が女性の話に期待する優しさについて、「それもめったに耳にするわけではないのだが」とすかさず付け加え、優しさを女らしさと結び付けるジェンダー規範の虚構性を突いている点にも注意したい。
- (9) ヤマモトは、『トリビューン』を辞職した理由として、学業に戻ろうと決意したこと（実際にはそうせず、執筆に専念することになる）や、ちょうどその頃自らは独身ながら身寄りのない赤ん坊 Paul を養子にすることを挙げていた(Crow, 77)が、ごく最近のインタビューでは “the oppression and discrimination [faced by blacks] finally got to me, and the weight was just too much to bear. So after two, three years I left.” (Cheung, 2000 : 364) と、その背後に人種問題の軋轢があったことを明かしている。

Works Cited

- Cheung, King-kok, “Introduction.” *Seventeen Syllables and Other Stories*. Hisaye Yamamoto, 1988.
- . ed. “*Seventeen Syllables*”. New Brunswick, N. J.: Rutgers UP, 1994.
- , ed. *Words Matter : Conversations with Asian American Writers*. Honolulu : Univ. of Hawaii Press, 2000.
- Chong, Dennis. *Collective Action and the Civil Rights Movement..* Chicago & London : Chicago Univ. Press, 1991.
- Crow, Charles L. “A MELUS Interview : Hisaye Yamamoto”. *MELUS*, 14. 1. 1987 :

72-82.

- Horne, Gerald. *Fire This Time : The Watts Uprising and the 1960s*. Charlottesville and London : University of Virginia, 1995.
- Kim, Elaine H. *Asian-American Literature : An Introduction to the Writing and Their Social Context*. Philadelphia : Temple University Press, 1982.
- Kitano, Mary. "SNAFU." *Rafu Shimpo*, Los Angeles, November 21, 1949.
- Kramarae, Cheris and Paula A. Treichler. *A Feminist Dictionary*. London : Pandora Press, 1985.
- Los Angeles Tribune*, Los Angeles, 1945-48.
- McDonald, Dorothy Ritsuko, and Katharine Newman. "Relocation and Dislocation : The Writings of Hisaye Yamamoto and Wakako Yamauchi." *MELUS* 7. 3, 1980 : 19-32.
- Rolf, Robert T. "The Short Stories of Hisaye Yamamoto, Japanese American Writer." "Seventeen Syllables." Ed. King-kok Cheung, 1994.
- Williams, Juan. *Eyes on the Prize : America's Civil Rights Years 1954-1965*. New York : Penguin, 1987.
- Yamamoto, Hisaye. "The High-Heeled Shoes". *Partisan Review*. October 1948 : 1079-1085.
- . "The High-Heeled Shoes, A Memoir" *Seventeen Syllables and Other Stories*. New York : Kitchen Table : Women of Color Press, 1988 : 1-7.
- . "Writing." "Seventeen Syllables" 1994. Ed. King-kok Cheung.
- 秋元秀紀『ニューヨーク知識人の源流—1930年代の政治と文学』彩流社、2001年。
- 戒能民江「性暴力、人権侵害、DV、セクシャル・ハラスメント、子ども虐待」『“ポスト”フェミニズム』竹村和子編、作品社、2003年。
- 村山瑞穂「ある異人種間文化統合の試み—ヒサエ・ヤマモトと『ロサンゼルス・トリビューン』」愛知県立大学外国語学部『紀要』第35号、2003年127-141頁。